

第 23 回人文学・社会科学特別委員会における主な御意見

（「今後の人文学・社会科学の振興に向けた推進方策について（中間まとめ）（案）」について）

- 人文学・社会科学は、本来的に、その「想像力」や湧き出る知的好奇心のようなものによって、人間が生きていく力や人間・社会の根源的な部分を根底で支えていると考えられる。これらは社会への還元を考える場合にも重要な視点である。こうした人文学・社会科学がもっている力というものをもっと滲ませてほしい。こうしたことがベースにあることを認識した上で、社会課題の解決への貢献を考えていくことが重要である。
- グローバルな知に貢献するという観点も重要である。また、我が国の優れた研究が海外で必ずしも認知されていない状況があるが、これを改善するためには、海外への発信をサポートする人材について、キャリアパスも含めて検討し育成していく必要がある。
- 人文学・社会科学の振興として、異分野融合やデータサイエンスなど方向性に少し偏りがあるような印象がある。各専門分野においても方法論の展開や分野内の新たな融合があり、そうした部分も重要である。
- 研究成果の海外への発信に関して、本来、専門分野の知識があり背景等を理解している研究者自身が発信することが最も望ましいが、国内で「日本」に関して研究するような研究者にとっては、「翻訳」が時間的・労力的に困難な面がある。よって、専門分野や言語に通じて「翻訳」をサポートできる人材を育成していくことが重要である。例えば、博士後期課程を修了した後のキャリアパスの一つとして、こうした専門人材もあり得ると考えられる。
- 「課題解決」という文言について、人文学・社会科学には、本来、課題を設定することが大事であるという哲学があった。そうしたことも少し入れ込むことができればよいと思う。
- 異分野融合は実際にはなかなかハードルが高いものであり、もちろん目指すところではあるが、やはり専門分野にしっかり足を置いた上での異分野融合であるということを強調したほうがいい。
- 異分野融合・共同研究は手段であり、本来、自身の専門分野を発展させることを前提としたものである。こうした取組にあたっては、専門分野における足場固めが若手に限らず多くの研究者にとって極めて重要である。

- 人文学・社会科学の研究者は、必ずしも全てがデジタル化や他分野との連携に積極的という訳ではない。そうした状況の中で、今後若手を育成する側の研究者に対しても、データ公開や共創に向けてサポートを行うような場をつくることが重要である。
- DXに係る基盤など研究の入口にあたる部分や、広報や成果の可視化といった研究の出口にあたる部分については記載があるが、その間にあたる研究のプロセスに係る部分の説明をもう少し厚くするとよい。
- 日本語による国内の研究成果を迅速に海外に発信するという点からは、タイトルと研究成果の要約版だけでもいち早く外国語で作成し、確認の上、海外に向けて可視化するという視点も重要である。
- 人材育成の項目に関して、現在のタイトル（「人文学・社会科学の振興に向けた人材の育成」）は広く一般的な意味に捉えることができ、その場合、これまで議論してきたテーマを超えた別の論点が生じてしまうことになる。よって、これまで取り上げてきたテーマにおける人材育成の論点にフォーカスしながら、人文学・社会科学全体の振興に資する人材育成の観点は少ししみ出る程度とすることがよいのではないか。